

『讚岐典侍日記』 上巻における「明く」について

岸 千里

一、はじめに

『讚岐典侍日記』の作者は堀河帝と鳥羽帝に仕えた女房の藤原顕綱女、藤原長子であると考えられている（以下長子とする）。現在『讚岐典侍日記』は上下二巻構成であるという説が有力となっている。

日記の主軸となっているのは長子が堀河帝と過ごした日々に関する回想となっているが、その中でも上巻では堀河帝が発病し亡くなるまでの約一ヶ月あまりのことが書かれている。堀河帝は普段から病弱だったようで、同時代の漢文日記とされる『殿曆』^(注一)・『中右記』^(注二)・『水左記』^(注三)において堀河帝がたびたび体調を崩していた事が記されていることを小谷野純一氏が指摘している^(注四)。

また、『讚岐典侍日記』上巻では、

六月二十日のことぞかし。内は、例さまにもおぼしめされざりし御けしき、ともすれば、うち臥しがち

にて、「これを人はなやむとはいふ。など人々は目も見たてぬ」と仰せられて、世をうらめしげにおぼしたりしものを。「こと重らせさせ給はざりし折、御祈りをし、つひにありける御ことをも譲りまゐらせらるる」、とわが沙汰にも及ばぬことさへぞおぼゆる。

とあり、堀河帝は亡くなる一ヶ月程前に体調を崩したことが見て取れる。重病化したのは七月六日^(注五)となっており、ここから長子は堀河帝に近侍し続け、看病をしていく。その看病の中でたびたび用いられるのが「明く」という表現である。

本稿は主に上巻に見られる「明く」に注目し、この表現が『讚岐典侍日記』の本文中においてどのような意味を持つているか、考察する。

※『讚岐典侍日記』の本文引用および該当本文の所収番号（漢数字）は小谷野純一氏『校注讚岐典侍日記』（新典社 一九九七年）に拠る。なお、傍線部等は私に付した

ものである。

二、『讃岐典侍日記』における「明く」について

上巻において、「明く」は六例みられる。

①上巻 四

明け方になりぬるに、鐘の音聞こゆ。「明けなむとするにや」と思ふに、いとうれしく、やうやう鳥の声など聞こゆ。朝ぎよめの音など聞くに、「明け果てぬ」と聞こゆれば、「よし、例の、人たちおどろき合はれなば、かはりて少し寝入らむ」と思ふに、御格子まわり、大殿油まかなどですれば、「やすまむ」と思ひて、単衣を引き被くをご覧じて、引き退けさせ給へば、「なほ、『な寝そ』と思はせ給ふなめり」と思へば、起き上がりぬ。大臣殿三位、「昼は御前をばたばからむ。やすませ給へ」とあれば、下りぬ。待ちつけて、「われも強くてこそ扱ひまゐらせ給はめ」といふ。なかなか、かくいふからに堪へ難き心地ぞする。

②上巻 五

夕つ方、帰らせ給ひぬれば、誰も誰も参り合ひぬ。明けしき、うちつけにや、変はりてぞ見えさせ給ふ。「けふしも、少し夜の明けたる心地しておぼゆれ」と

仰せらるる聞く心地のうれしき、何にかは似たる。

③上巻 七

かやうにてこよひも明けぬれど、なほ弱げにみえさせ給ふ。けふも暮れぬ。

十七日の暁に、大式三位、「あからさまにまかでて、この胸の堪へ難くおぼゆれば、湯少しこころみて、立ち帰り参らむ」とて、出で給ひぬ。暮るるひとしく参り給ひて、うち見まゐらせて「あないみじ。昼見まゐらせざりつる程に腫れさせ給ひにけり」などいひ合はせらるるを聞かせ給うて、「何ごといふぞ」と仰せらるれば、「昼の程に腫れさせおはしましにけることを申しさぶらふなり」と申さるれば、「今は、耳もはかばかしく聞こえず」と仰せられて、いとど弱げに見えさせ給ふ。

④上巻 八

明けぬれば、大臣殿参り給ひて、院の御使いにて、ことどもありげなるけしきなれば、心なき心地しぬべければ、寝たり。何事にか、こまやかに申させ給ふ。「御位譲りのことにや」とぞ心得らるる。申し果てて、臥したる所にさし寄りて、「御かたはらに参らせ給へ」といひかけて、立ち給ひぬ。

⑤上巻 九

参りてみれば、殿や大臣殿など、「院より、『戒うけさせ給ふべきなり』と奏せさせ給うけり」とて、賢達法印召すべき沙汰せられ、その御まうけどもせらるる程なりけり。かやうののちならば、夜も明けぬべければ、「宮の御方より召しつれば、参りたりつれば、かうかうこそ仰せられつれ」と申す。「道の所狭きぞ」と弱げに仰せらるる、苦しげにおほしめしたり。

そのほかに、複合語が一例と形容詞が二例見られる。

⑥上巻 一一

つくづくと聞かせ給うて、「衆中之糟糠仏威徳故去」といふ所より御声うちつけさせ給ひて、つゆばかりが程とどこほる所なく、優々と読ませ給ふ御声、問うとき阿闍梨の御声おし消たれて聞こゆ。阿闍梨も、とりわきてそこをしも読み聞かせまゐらせらるる、「明け暮れ、一・二の巻をうかめさせ給ふ」と聞きおき給へることなればなめり。

⑦上巻 一四

「大臣殿、参らせ給ひて、うち見まゐらせて、いかにおぼし解くにか、持ち給へる扇の骨をたたみながら

はらはらとうちすりて、泣きて出で給ひぬ」と思ふ程に、「今は『御格子まゐれ』とありけるにや」と見えて、すなはち、親しき殿上人なめり、源中納言の四位少将顯国・右大臣殿の加賀介家定、あかあかと日射し入りに明かきに、はらはらと下ろして往ぬ。「あな、あさまし。こはいかにしつるよ」と、え避らぬ、心にまかせぬ日の暮るるだに、「大殿油をとくさし出でよかし」と、まだ下ろさぬ前に心もとなくおぼえしものを、「はなばなと射し出でたる日に下ろしこめて、わざと暗うなすよ」とおほゆるに、ものぞおぼえぬ。藤三位、「あな、いみじ。かくはいかに下ろしつるぞや。『かひなき御顔ながらも、明かくてまもりまゐらせてあらむ』とこそ思ひつれ」と、声も惜しまず泣き給ふ。

①③④⑤は夜明けについての表現である。①は「明け方が鳴ることで夜明けを迎えようとしている場面であることが読み取れる。①には二つの「明く」があるが、一つ目は鐘の音を聞いた長子が「明けなむとするにや」と夜明けを予感する表現となっている。そして鐘の音により起き出した人々の立てる生活音によりようやく「明け果てぬ」と完全に夜が明けたことを確信している。③は「こよいも明けぬれど」④は「明けぬれば」⑤は「夜も明けぬべければ」

とあるが、特に直前に夜を示す語句がある③と⑤は①同様、夜明けの描写であることが明らかである。④は③⑤のように夜明けであると断定できる語句はない。しかし、①の二つ目の「明く」のように、人々が夜明けと共に起き出して行動することをあてはめれば、④は白河院の使いで来た大臣殿が「明けぬれば」により行動を起こし、堀河帝の元へ来たと考えられるので、やはり夜明けに関する描写であると考えられるだろう。

②も前述した①③④⑤と同様夜明けについての表現だが、堀河帝が自身の病状について夜明けのような心地だとしてしていることから、②は実際の夜明けについての表現ではなく、比喩表現として用いられている。

また、⑥は阿闍梨が堀河帝にお経を唱え聞かせることに関し、堀河帝は日頃、明けから暮れまで巻一と巻二を浮かべなさっていたことを聞き及んでいとなつてい。よつてこの「明け暮れ」は「始終」という意味で用いられているため、夜明けを意味する語句としては用いられていないことになる。

⑦は形容詞ということもあり、様子や状態を表している。一つ目の「あかあかと日射し入りて明かきに」に関しては直前に夜であったことを示す語句がないため、夜明けと共に日が射したとも考えられる。しかし直前にある一三節では、堀河帝が崩御した場面において「日はなばなと

射し出でたり。日の闌くるままに」との表現がある。そこから一四節の間に一日以上の時間が経過していたとは考えにくい。よつて⑦の一つ目は夜明けについての表現ではないだろう。二つ目の「明かくてまもりまゐらせてあらむ」は、直前に「あかあかと日射し入りて明かきに」とあるので、明るいという状態について示す語句となつている。

なお、下巻での「明く」は形容詞・複合語も合わせて七例用いられている。

⑧下巻 一七

かやうにてのみ明け暮るるに、「かく里に心のどかなること難し。五・六日になれば、内侍の許より、『人なし。参れ』といふ文の来し」など思ひ続けられて、過ぐす程に、「御即位」など、世にののしり合ひたり。

⑨下巻 二〇

朔日の日の夕さりぞ参り着きて、陣入るるより、昔思出でられて、かきぞくらさるる。局に行き着きて見れば、異所に渡らせ給ひたる心地して、その夜は、なんとなくて明けぬ。

⑩下巻 二一

明けぬれば、みな人々起きなどして、見れば、御前の御簾、いとおびただしげなる葦とかいふもの、懸けられたり。縁は鈍色なり。御障子の御几帳、同じ色の御几帳の手白きなり。御梳櫛の大床子もなし。「かかる折にはなきにや。幼くおはしませばか」とぞ。ものなどまゐらすれば、笥子してめすぞあはれなる。

⑪下巻 二七

御扇どもまうけて、待ちゐさせ給ふに」とあれば、この人たちに具して参りぬ。待ちつけて、泉の有様、うちうちに関ひなどして、「扇引き、今宵は。さは」と仰せられしかば、「明けむが心もとなきに、『今宵』と思ふに、人たちのけしきの暗くて見えざらむこそ、口惜しくさぶらへ」と申ししかば、つとめて、「明くるや遅き」と始めさせ給ひて、人たち召し据えて、大式三位殿を始めて、ゐ合はれたりしに、「先づ引け」と仰せられしかば、引きしに、「美し」と見しを引き当てで、中に悪かりしを引き当てたりしを、上に投げ置きしかば、「かかるやううある」とて、笑はせ給ひたりしことを、

⑫下巻 三〇

暮れ果てぬれば、行幸なりぬ。御供に、やがて引き続けて参りぬ。中御門の門入るより、思ひしに著くかきくらさる。「香隆寺に参る」とて見入れしに、「わが明け暮れ出で入りし門ぞかし。をととの十二月の二十余日にこそ、堀河院に移ろはせたまひしか。

⑬下巻 三二

明けぬれば、「いつしか」と起きて、人々、「珍しき所々身む」とあれど、具して歩かば、いかがもののみ思ひ出でられぬべければ、ただ恍れてゐたるに、御前のおはしまして、「いざ、いざ、黒戸の道をおれら知らぬに、教へよ」と仰せられて、引き立てさせ給ふ。

⑧⑫は上巻⑥同様「明けも暮れも」となるので、⑥の上巻同様に「始終」や「常に」といった意味でとらえることができるだろう。しかし⑧は「かやうにてのみ明け暮るるに」とある。これは前節である下巻一六で弁三位からの手紙に、長子が鳥羽帝へ出仕することを白河院が望んでいるとの趣旨が書かれており、長子が宮中への再出仕に思い悩む心中について書かれていた。長子は手紙を手にして以来、悩みながら過ごしてきたことを考えると、⑧の「明け暮るる」には、「始終」という意味だけではなく、手紙を

手にしてからの時間経過を表現しているとも考えることができるだろう。⑫では香隆寺に参詣する際通った中御門に懐かしさを覚え、かつて始終出入りしていた場所であったことを回想している。よって⑫の「明け暮れ」は「始終」という意味合いで用いられている。

⑨⑩⑪⑬は上巻の①③④⑤同様、夜明けについての表現であると考えられる。⑩⑬は上巻の④同様、夜に関する直接的な語句が見られないが、前述したように人々が夜明けと共に起き出して行動する点が一致するので、やはり夜明けについての表現であると考えられる。

このように『讃岐典侍日記』で用いられている「明く」は多くの場合、夜明けを示す意味で用いられている。

また、上巻・下巻において「明く」同様に繰り返し用いられているのが「昼つ方」「暮る」「暮れ果てぬれば」などの表現であることから、「明く」は夕暮れや夜からの時間経過を表現している場合もあると考えられるだろう。

三、「明く」についての先行研究

「明く」が『讃岐典侍日記』において複数の意味を持っていることについて確認してきたが、ここからは主に上巻の「明く」について先行研究を確認しておきたい。

はじめに①について小谷野純一氏は^(注六)

夜を徹し近侍し続けた自身の、「明け方」に対する

「うれし」という如き感受の発露に傾注しているのである。何よりも、この場合、緊迫感に就縛された夜の時間からの脱出感をこそ措き定めればよかったのではないかと評される赴きにある。

としている。また、高野祥子氏も^(注七)①について小谷野氏と同様の見解を述べているが、特に夜について、

「明けなむとするにやと思ふに、いとうれしく」という思いは、夜が帝の死を喩する不安なものであることとの証左であり、「いとうれしく」と夜明けを喜ぶ心情は、夜明けが帝の生ある一日がまた始まることを象徴するものである。昨日で帝の命が終わらないと言うことは、また今日、そして明日、更にその先への未来へと続く可能性を胚胎している。夜明けとは讃岐典侍にとって、帝の命がある証なのである。(中略)帝の「夜の明けたる心地」がするという告白は、そのまま讃岐典侍の「うれしさ、何にかは似たる」という喜びの心情を喚起させる。夜明けが彼女にとって大きな意味を、すなわち帝の生というイメージを持っていたこととの証左である。

としており、小谷野氏が夜からの解放とする一方、高野氏は夜を死への不安がつきまとうため、夜明けを生イメージがあるとして定義し、喜びの心情を表したとしている。

②については飯島康志氏^(注八)が次のように見解を述べている。

例えば、「けふしも、少し夜の明けたる心地しておぼゆれ」(第五節)にその感情が窺える。重病の状態を「夜」に譬え、小康の状態を「明けたる」と置き換えて、病苦からの解放を語る件は、まさに象徴的とも言える。そんな中、単独での看護に於ける、不吉な時間からの解放には、不吉な時間帯の脱出を意味する朝が絶好のタイミングであったのだ。「明け果てぬ」と確かに認め、待ち望んだ光と、看病の達成感に安堵しながら、長子は自室に下った。

三氏は①②の本文で長子が夜明けに対して「うれし」や「喜び」といった感情が述べられていると指摘をしている点が共通している。

その中でも高野氏、飯島氏は夜を「不吉」「死」と定義し、小谷野氏は「夜明け」を「脱出感覚」としている。

②において、病の堀河帝が自身の状態を「少し夜の明けたる心地」と夜明けに例えた表現をしていたことを受けた長子が「聞く心地のうれしさ、何にかは似たる。」としていることに対し、飯島氏は夜明けとの関係性について述べていた。①で夜明けを望んだ長子と、②で自身の状態を夜明けに例えた堀河帝から、夜明けは長子だけでなく堀河帝にとっても好ましい状況であるという共通概念が存在していたと思われる。つまり少なくとも長子と堀河帝は夜明けという事象に対し好意的な見解を持っていたこととなる。

しかし長子は①においては「明く」ことを「うれし」としていたが、②では帝がいつもに比べて不快感が少ないことに対して「うれし」とし安堵を表していることから、この二つの「うれし」はそれぞれ向けられている対象が違っていることに注意したい。

さらに、時間的な概念について石埜敬子氏は、

漢文日記の記録者たちが客観的な時刻の推移から常に関心をそらせることができないのは、生活や行動が公のものであり社会性を有しているからである。その点一般的に女流日記は時刻を明言している場合が少なく、多くは「あけ方」「昼つ方」「暮れゆくままに」と言った書き方であったり、月の入りなどで漠然と示している。日記そのものに日次的要素が少ない上、人生の多くをたゆたいの思いの中で主観的時間の内に生きてきた彼女たちにしてみればそれは当然のことでもあったが、しかし、女流日記に客観的記述が皆無かといえ、必ずしもそういうわけではない。

とし、「明く」などの表現が多用されているのは主観的時間によるものだとの見解を示している。小谷野純一氏は

全ての時間の客観化には繋がらぬ取り込みとなつていくわけで、時間の推移が、外在的時間に基づきながらも不明確に大略的に指示され、あるいは、内在的時間の枠組みによって時間が主観的に提示されることに

なる。

としている。つまり石埜氏、小谷野氏は日記内の時間について公的時間軸が中心ではなく、主観的時間軸によって進められていると指摘している。

一方、本文③⑤の夜という時間帯に関して福家俊幸氏^(注十一)は、

夜は魔の時間であるが、それが何故魔の時間であるかといえ、その間世界は闇に閉ざされるからである。人間の闇に対する根源的な恐怖は、闇の中に自らに危害を加える魔の存在を見せた。闇の中では悪霊が跳梁跋扈し、生きとし生ける者の生を奪おうとした。闇は死の世界であった。闇と対立する光は、従って生を表象する。

としている。

また、飯島康志氏^(注十二)は、

人間の心底に潜在する闇への畏怖感、それに結合する怪異を語るには、夜という場面設定は必要不可欠であったと思しい。他、同巻が影響を与えたとの説もある著者不詳『今昔物語集』の霊鬼説話など、古典文学に於ける怪奇の多くは、時間設定を夜に据えている点、当時の思想観念が窺われるところであろう。

『讃岐典侍日記』での夜への視点も、このような風潮の中で例外ではなく、闇への恐怖・不安が見て取れ

る。その対象となるのは、堀河帝が夜という邪悪な時間帯の作用に困り、病状の悪化を誘発する懸念に他ならない。

とし、福家氏、飯島氏は「夜」という時間が持つ作用により堀河帝の病状が悪化する事について論じている。この二氏の論を踏まえると、長子が夜明けを望んだのは夜闇という不安要素からの心情描写であるということになる。

『讃岐典侍日記』は「日記」と呼ばれているにも関わらず、その日付は日次のもではないこと^(注十三)から、記述のある場面が必ずしも公的時間軸に沿っているわけではないということになる。また、一日の区切りを日付で示すのではなく、日の動きによって描写している。日付を付さないことにより、前日から時間の流れが感じられる表現となっている。

先程、石埜氏の指摘にもあったが、夜が明けることにより具体的な日付が付されていなくとも、その日何日であったかを考えることができる。各注釈書が先に提示した本文の「明く」についてどのような注を付けているか確認したい。

・玉井幸助氏『讃岐典侍日記通釈』（朝日新聞社 一九五三年）

④「明けぬれば」十八日

・石井文夫氏『讚岐典侍日記古典全集』（小学館 一九七一年）

③「明けぬれど」七月十六日のこと。

④「明けぬれば」嘉承二年（一一〇七）七月十八日。

・草部了円氏『讚岐典侍日記日記 研究と解釈』（笠間書院 一九七七年）

④「明けぬれば」夜が明けて七月十八日になったこと。

・今井卓爾氏『讚岐典侍日記譯注と評論』（早稲田大学出版部 一九八六年）

④「明けぬれば」明けて七月十八日になったので。

・小谷野純一氏『校注讚岐典侍日記』（新典社 一九九七年）

③「明けぬれど」七月十六日となる。

④「明けぬれば」七月十八日。崩御の前日。帝は重体に陥っており、『殿暦』当日条には「主上極重御、大略無術事」などと、術なき容態となっている旨の記載が窺われる。

⑤「夜も明けぬべければ」受戒は、『中右記』十八日条に拠れば夜半であった。

・岩佐美代子氏『讚岐典侍日記注釈』（笠間書院 二〇一二年）

④「明けぬれば」（補説）十八日。

このように各注釈書では「明く」という語に対して具体的な日付を附している。小谷野氏の注に見られたように同時代の漢文日記である『中右記』と『殿暦』の記載を参考に内容を照らし合わせ、具体的な日付を出していると思われる。よって『讚岐典侍日記』の本文が日次の記事でなくとも「明く」という表現から本文がいつの出来事なのか日付を導き出すことができる。

四、他の日記における「明く」

同時代の日記文学作品において「明く」がどのように用いられていたか見ていく。

『土佐日記』^(注十四)では次のような場面がある。

九日。心もとなさに、明けぬから、船を引きつつ上れども、川の水なければ、あざりにのみぞゐざる。

『土佐日記』のこの場面では、冒頭に九日と日付があることから九日の夜明けだと分かる。よって『讚岐典侍日記』のように「明く」が夜明けの時間帯を表現しつつも既に日付が附されていることから具体的な日付を指し示す表現とはなっていない。

『和泉式部日記』^(注十五)では次のように用いられている。

月もいと明ければ、「下りね」としひてのたまへば、あさましきやうにて下りぬ。「さりや。人もなき所ぞかし。今よりはかやうにてを聞こえむ。人などのある折にやと思へば、つつまじう」など物語あはれにしたまひて、明けぬれば、車寄せて乗せたまひて、「御送りにも参るべけれど、明くなりぬべければ、ほかにありと人の見むもあひなくなむ」とて、とどまらせたまひぬ。

『和泉式部日記』では一例目の「明ければ」は月の明るさについての表現である。二例目及び三例目は『土佐日記』同様、夜が明けるといふ意味で取ることができるが、この記事日は元々「五月五日になりぬ」から始まっているので五月五日の夜のことだと分かる。よって「明く」ことで五月六日になったという日の移ろいを推測することができる点は、やはり『讃岐典侍日記』と同じである。

『紫式部日記』^(注十六)

十日の、まだほのほのとするに、御しつらひ変はる。白き御帳に移らせたまふ。殿よりはじめたてまつりて、君達、四位五位どもたち騒ぎて、御帳の帷子かけ、御座ども持てちがふほど、いと騒がし。

日一日、いと心もとなげに起き臥し暮らさせたまひつ。御もののけども駆り移し、限りなく騒ぎののし

る。月ごろ、そこらさぶらひつる殿のうちの僧をば、さらにもいはず、山々寺々を尋ねて、験者といふかぎりは残るなく参り集ひ、三世の仏もいかに翔りたまふらむと思ひやらる。陰陽師とて、世にあるかぎり召し集めて、八百万の神も、耳ふりたてぬはあらじと見えきこゆ。御誦経の使、立ち騒ぎ暮らし、その夜も明けぬ。

『紫式部日記』も冒頭が「十日の、まだほのほとするに」から始まっており、『和泉式部日記』同様、「明く」とで十一日になったことが分かる。

これらのことから「明く」は必ずしも次の日になったと言ふことを表現するのではなく、多くは夜明けの意味に沿って用いられていることが分かる。しかしその記事の前後に具体的な日時が示されていれば、その「明く」の前後がいつなのか結論付けることは可能である。

五、「明く」の意味について

『角川古語大辞典』^(注十七)によれば、「明く」は「開く」「空く」と並び次のようになっている。

あ・く「開・明・空」一定の閉じふさいでいたものがなくなつて、からの状態になること。または、そうすること。また、拘束された状態から自由な状態になる(する)ことにもいう。

- 1 朝が来て明るくなる。
- 2 日や年が改まる。
- 3 閉じていたものを、ひらく。
- 4 時間または空間的に、ある間隙をつくる。
- 5 からにする
- 6 ひまにする。フリーにする。
- 7 金を遣いなくす・金を使い果たす。

『角川古語大辞典』を元にして考えると、『土佐日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『讃岐典侍日記』における「明く」では1の「朝が来て明るくなる」や2の「日や年が改まる」性質が認められる。また、諸橋轍次『大漢和辞典』（大修館書店 一九六〇年）の「明」も同様に「あける。夜がしらむ。」や「よあけ。あけがた」といった語釈もみられる。

『類聚名義抄』^(注十八)においては、「明」には「アキラカナリ」「アカス」「アラハス」「アス」「アク」「ヒカル」「ミル」「ミツ」「ナル」「タスク」「アケヌ」という意味がある。

この「タスク」は「助く・扶く・輔く」といった字が考えられる。これらは力添えをし、苦難や病苦から救うことを表している。

六、まとめ

『讃岐典侍日記』の「明く」は次のように考えられる。まず、従来の解釈にもあった「夜明け」という時間帯の表現である。これは今回提示した本文の中で、「明く」が用いられていた①③④⑤⑨⑩⑬に当てはめることが可能である。

また、「明く」を『中右記』や『殿暦』などの同時代の外的資料によって公的時間に照らし合わせると具体的な日付はいつになるのかという指摘は本文③④⑤に多く見られた。ただし、③にもあるように、必要があれば具体的な日付の提示がなされていたことを考えると、「明く」により公的時間軸を主張したとは考えにくいだろう。つまり、日記に公的な日付を附さなかったのは公的時間軸に沿った記録性を重んじていなかったからであると結論づけたい。

長子が夜明けを「うれし」と好意的な見方をしていた本文①では堀河帝の病状が「明く」ことよって救われることを望んでいたとの解釈がされてきたことから、「明く」は堀河帝の病状安定・回復に重きを置いてた表現であると考えた。さらに『類聚名義抄』の「明」には「タスク」という意味がみられることから、長子は「明く」ことで堀河帝が助かるのではとの望みをもっていたとの見方が出来る。

今回、長子と堀河帝は夜明けという事象に対し共に好意的な見解を持っており、夜明けが良いものであるという共通認識があったことにも注目した。長子は①においては「明く」ことを「うれし」としていたが、②では帝がいつもに比べて不快感が少ないことに対して「うれし」とし安堵を表していることから、この二つの「うれし」はそれぞれ向けられている対象が違っていた。はじめにでも提示したが、堀河帝は「『これを人はなやむとはいふ。など人々は目も見たてぬ』と仰せられて、世をうらめしげにおぼしたりしものを。」としていたところからも、「明く」ことで不安要素のある夜闇が終わり、人々が起き出せば堀河帝の病状は良い方へと変化するだろうと長子は考えたのだろう。よって夜明けにより人々が起き出してきたことで「明け果てぬ」としたのだと考えたい。

また、本文③の「明けぬれど」のように逆接が使われているところからも、長子にとっては「明く」ことで堀河帝が助かるという法則が成り立たなかったことになることを示しているといえよう。夜が明ければ本来は快方に向かうはずが、状態が芳しくないまま一日が終わってしまったことから「明けぬれど」となったのだろう。

結果として上巻の「明く」は長子の助けを求める内情が表現された言葉であるとしたい。

この「明く」についてはこの場面のみで終止する問題で

はなく、関連する「日」や「灯り」などの照らすものについて今後更に見解を深めていきたい。

【注】

(注一) 大日本古記録『殿暦』(岩波書店 一九六三年)

(注二) 増補史料大成『中右記』(臨川書店 一九六五年)

(注三) 増補史料大成『水左記・永昌記』(臨川書店 一九六五年)

九六五年)

(注四) 小谷野純一『讃岐典侍日記への視界』(新典社二〇一一年)の「I 上巻の叙述世界」において、嘉

承二年七月一九日の崩御より数ヶ月前の病状について、各漢文日記より引用しまとめている。

(注五) 『讃岐典侍日記』本分には「かくて、七月六日より、御心地大事に重らせ給ひぬれば」とある。

(注六) 小谷野純一『讃岐典侍日記上巻の叙述世界』(『平安後期女流日記の研究』教育出版センター 一九八三年)

(注七) 高野祥子氏『『讃岐典侍日記』における堀河帝崩御の情景―「明き」日の指す死をめぐって―』(『日記文学研究誌』第九号 二〇〇七年三月)

飯島康志氏『『讃岐典侍日記』における照明具』(大東文化大学日本文学学会『日本文学研究』二〇一〇年二月 第四十九号)

(注九) 石埜敬子氏 「讃岐典侍日記における時間の構造」

(論集中古文学三「日記文学 作品の試み」笠間書院 昭和五十四年)

(注十) 注六前掲 小谷野純一 「讃岐典侍日記上巻の叙述

世界」(『平安後期女流日記の研究』 教育出版センター 一九八三年)

(注十一) 福家俊幸氏 「『讃岐典侍日記』上巻の時間―闇

の中の死―」(保谷・武蔵野女子大学紀要編集委員会『武蔵野女子大学紀要』一九九四年一月)

(注十二) 注八前掲 飯島康志氏 「『讃岐典侍日記』にお

ける照明具」(大東文化大学日本文学学会『日本文学研究』二〇一〇年二月 第四十九号)

(注十三) 「『讃岐典侍日記』に具体的な日付の明記がされ

ているのは上巻で五例、下巻では二十二例確認できる。日付のない記事でも行事や漢文日記等外的資料及び記録から日付のない日があるか断定は可能である日も存在するが、ここでは含まない。

(注十四) 菊地靖彦ほか編 新編日本古典文学全集十三

『土佐日記 蜻蛉日記』(小学館 一九九五年)

(注十五) 石井文夫ほか編 新編古典文学全集二十六『和

泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』(小学館 一九九四年)

(注十六) 石井文夫ほか編 新編古典文学全集二十六『和

泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』(小学館 一九九四年)

(注十七) 『角川古語大辞典』(角川書店 一九九九年) 今

回は力行下二段の項目を挙げた。

(注十八) 『類聚名義抄』(風間書房 一九七五年)

【付記】

本稿は平成二十八年十一月十二日(土)におこなわれた「大東文化大学院文学研究科日本文学専攻院生会秋季研究発表会」(於 大東文化大学)において発表した原稿に加筆修正したものである。ご教示くださった方々に厚く御礼申し上げます。